

## 第 45 回大日本耳鼻咽喉科中國地方會記事

期 日 昭 和 15 年 12 月 8 日

場 所 岡 山 醫 科 大 學 第 1 講 堂

守 屋 誠 編

## 1. 氣管支異物 2 例

熊 野 武 雄 君

第 1 例は生後 8 箇月の女兒の振ち釘 2 本の内 1 本は口中より母により取出され、1 本の所在不明となり同時に咳嗽あり之は次第に輕快せしも呼吸頻數となり、左肺全體濁音、呼吸音減弱、左後上方に輕度の囉音を認め、右肺は正常なるより左氣管支異物と診断、事後 3 時間に X 線寫眞撮影せしに左肺は肺虚脱像を呈し、意外にも異物は右肺に存在せるを知り、直に下氣管支鏡法により摘出す、左肺虚脱陰影は 24 時間後に消失す。

第 2 例 某歩兵准尉。食後裁縫用まち針にて臼齒清淨中該針の紛失に氣付く、咳嗽疼痛なかりしに事後 12 日目に左側顎下部に嚙下痛起り、X 線寫眞により右氣管支内に鋭端上向せる針を認め、13 日目に上氣管支鏡法により全長の 3/4 まで縦隔竇内に上方に向ひ刺入されたる針を摘出せり。

第 1 例に於て演者は氣管支の完全閉塞をなすとは思はれざる斯かる振ち釘の如きものの刺戟により、臨牀的肺虚脱又は其の前程と認む可き症狀の既に 3 時間後に、比較的著明に發來せし事に注意し、之は從來實驗的研究による肺虚脱は氣管支完全閉塞により而も完全閉塞後 3 時間に始まり、約 24 時間後にして完成するものなる概念に少しく反するものとし臨牀的に興味ありとなし、第 2 例に就てはまち針の如き鋭端を有し而も相當の長さを

有するものの、成人にすら氣付かれざる如き巧しきを持つて氣流に乗り氣道内に吸入されたる事は甚だ興味ある事にて尙ほ本例の如く 13 日間も自覺症狀又は合併症もなく氣道内に存在せし事は、藏本の家兎による實驗に於て氣管竝に氣管支内の針類は咳嗽により其の殆ど多數が喀出され、残りたるものは大部分喉頭部に刺入され、重篤なる合併症を起すもの多き事及び從來臨牀的に之等針類の氣管支内異物例の報告少きに照し聊か奇異に感ずる所なるも之は本例に於ては幸に早く氣道内に固定され而も針頭に留を有せしため異動を爲し得ざりし事に起因するものとなし、之等 2 例は各々臨牀的に注意す可きものならんと述べたり。

追 加 高 原 滋 夫 君

氣管支異物の氣道内進入方法には誠に不思議に堪へない様に思へるものがある。最近余の遭遇した症例は滿 6 箇月の乳兒で、夜半母親の傍で睡眠中突然咳嗽、呼吸促迫を來し、號泣するので母親は母乳を飲ましめんとしたも之を欲せず極めて機嫌が悪い。以上の訴で翌日正午頃來院したるものなるが、當時呼吸の促迫は認められず顔色は良好で其の他咽頭内にも著變が認められないので經過を觀察して居た處、翌朝無理に母親が乳を飲ましめんとした際母親の愛用の裁縫用指環を喀出しの經路に就て訊ねしも

6箇月の乳兒なれば手を用ひて物を捉へる事は出来ないから不思議に堪へないとの事である。余の想像にては本例はおそらく母親が乳豆の代りに指環をはめて居る指を乳兒に啣へしめて睡眠して居たものを乳兒は吸引嚙したものと惟はれる。

## 2. 聲帯倒錯性動作症の1例

麻 植 二 朗 君

18歳の女の突然發作的に起りたる高度の呼吸困難を主訴として窒息に瀕せるものの喉頭検査にて通常の聲唇運動とは全然逆なる即ち吸氣時に聲唇閉鎖し、呼氣時に開大する頗る奇異なる所見を發見し、演者はこの患者に就き其の症狀經過を詳細に紹介せり。即ち發作時に於ける呼吸は、吸氣毎に其の初めに於て輕き吃逆様音を發し、吸氣の「フアーゼ」に移りたる瞬間には尙ほ少しく聲唇間隙を残し居るも吸氣深むと共に全く閉鎖して吸氣困難を來す。呼氣は之に反し聲唇開放する結果極度の聲音嘶啞を來す。かくて呼吸數1分間147にも及ぶ事あり。發病以來14日目、偶然2、3回の嘔嚏と共に聲唇運動全く平常に復し、治癒したるものなるが此間斯る呼吸困難の發作を繰返す事8回、短きは20分長きは1時間半に及びたり。尙ほ斯る聲唇運動はこの14日間は呼吸困難發作の治り居る時も尙ほ存在し、喉頭には特に器質的病變は認めざりき。演者はかかる現象に就き内外の文獻を引用し、本邦には類似症例の報告を見ずとし泰西に於けるペー、フレンケル、ボラック、オノデー等の見解を述べ、之等と本例とを併せ考察し本例は喉頭神經症の一種ならんと述べたり。

## 3. 膿瘍時扁桃摘後に併發せる嚙下肺炎の

1例 谷 豊君

33歳の女、1週間前より咽頭痛を訴へ、著明なる左側扁桃腺周圍炎の諸症を有したるも、數日に互れる試験的穿刺陰性に終り、疼痛の爲攝食不能にして極度に衰弱せしより初診後5日目兩側膿瘍

時扁桃摘を行ひたるに左側深部に膿瘍發見、多量なる排膿を得たるが、以來3日に互りて癢痕組織より少量の出血あり、其の都度電氣燒灼にて止血し居たり。術後5日にして左氣管支肺炎を惹起し、心臟衰弱を來し重篤なる經過を辿りて辛うじて一命を救ひ得たる症例を述べ、本例に於ける肺炎の原因は術後睡眠中に嚙下したる少量の血液に誘因を求め得べきも尙ほ之に術前比較的長期に互れる全身衰弱が大なる起因を爲せしものなるを尾錢、田中(稻)の例をも併せ考察し、この種手術に際しては全身抵抗力低下せし時に行はれる手術的操作なる事、炎症浸潤其の他病的變化の爲に手術時充分なる止血困難、惹いては平時扁桃摘の時よりも一層後出血の怖の多かる可き事等、前以て考慮しおく可き事なりと結べり。

## 追加(1) 小田大吉君

膿瘍時扁桃摘出に就ては我國に於ても外國に於ても賛否の意見あり。別に殊更に反對す可き理由無けれども余は一定の適示の下に行ふを可とするものと信ず。即ち余は扁桃腺周圍炎にして容易に化膿せざる場合、膿瘍の扁桃腺後下部に位する場合、膿瘍が上部に存する場合と雖も切開後症狀輕快せざる場合、全身傳染又は夫の來る徵ある場合竝に膿瘍切開後出血ある場合には進んで直に扁桃腺摘出を行ふの方針を取つて居る。其の他の場合殊に膿瘍が扁桃腺の上の方に存在する通常の場合の如きは切開を行ひ、扁桃摘は「インテルヴアル」に行つた方が患者に親切であると思ふ。膿瘍時扁桃摘は別に危険でないことが通例であるけれども又演者の経験せられた様なこともある可く、常に慎重に行ふ可きであらう。自分は一勿論斯様にして行はれたら演者の場合の合併症を避け得られたと云ふのではないが一膿瘍時扁桃摘に當つては近來仰臥位懸垂頭位でこれを行つて居る。これは攝食困難のために患者の衰弱して居る場合の少なくない膿瘍時扁桃摘の體位としては患者に苦痛を與へるこ

とを少くし且出血又は膿が一時に下咽腔に流下することなく、一つの用ふ可き方法であると考え居る。

#### 追加 (2) 田中文男君

私は私自身又は私の家族が扁桃腺周囲膿瘍に罹つた際には先づ進んでは膿瘍時扁桃摘は行はない、やはり膿瘍時扁桃摘は一定の適應症を定めて慎重に行ふ可きであると思ふ。

#### 4. 妊婦に來れる出血性鼻茸の1例

志水 清君

演者は30歳の經産婦に於て其の妊娠末期(第8箇月目)に、本症の頻發部位とせられたる鼻中隔キーゼルバツハ氏部(右側)、に而も又比較的短時日中に發生し、觀血的療法により治癒し、妊娠、分娩、産褥等に何等異常を認め得ざりし1例を報告し、妊娠を以て本症の普遍的原因となす能はざるも、少くとも妊娠に因る血行障礙が其の成因の一部を成せるものならんと述べたり。

#### 討論 田中文男君

出血性鼻茸なる名稱にて報告されて居るものは多数にあるか之は單なる臨牀的の命名で屢々誤解され易い。今の例も血管腫であつたのだから寧ろ鼻腔血管腫と云ふ方が學問的であらう。

#### 5. 舌骨下咽頭截開術によりて摘出した會厭囊腫の1例

岡田 要君

演者は會厭囊腫に對して舌骨下咽頭截開術を行つて之を摘出したる一經驗を述ぶ。患者は50歳の男子、喉頭の異様感及び輕度の發聲障礙を主訴として來科せしものにして、會厭舌面に於て、其の正中線より僅に右方に偏して存在せる小雞卵大の、而も廣き基底を有する一囊腫を認め、之に本法を施して摘出したり。從來本邦に於ける會厭囊

腫の報告は30餘例に達するも、夫等囊腫の大きさは概ね豌豆大迄位なるものにして、従つて咽頭内操作によつて切除、又は摘出を受け居るもの多し。而して本例の如く大なる會厭囊腫に遭遇せし場合、咽頭内よりキリアンの懸垂喉頭検査法を利用して摘出する事は勿論可能ならんも、演者は本法によりて咽頭内の操作に比し、至極容易に該囊腫を摘出し得たりと述べ、圖を以て舌骨下咽頭截開術を詳細に説明せり。

#### 追加 (1) 細見 英君

6歳の女兒にて呼吸困難を來したるものに對し寒踏係を用ひて演者の症例の如き位置より拮指頭大の囊腫を摘出せしに一時呼吸困難は去りたるも半年後再發を見たり。やはり私の場合も演者の方法によるをよかりしならんと思ふ。

#### 追加 (2) 小田大 吉君

舌根部或は會厭部の膿瘍摘出には通例懸垂喉頭鏡或は直達鏡下に行ふ方法が用ひられて居り、頭部より入つてこれを處置することはあまり顧みられない様である。會厭舌面の膿瘍に對しては多くこれを以て満足するとしても、舌根の膿瘍殊に囊腫に對しては懸垂喉頭鏡を以てしては處置困難であり、多くの報告を見ても囊腫が完全に摘出せられて居ない様である。囊腫を破らない様に剔出することゝ單に手際の問題でなく囊腫の根治的處置の要諦であることに鑑み、囊腫を充分に處置し得る術式が望ましい。この部分のものに對しては舌骨下咽頭切開は本邦に於ては、少くとも文獻に現はれた範圍では顧みられない様であるけれども、好い方法と信じ本例に試みた所、果して充分なる手術野を得、しかも囊腫のかなり大であつたにも拘らず、之に據つて樂に處置し得ることを知つた。これは斯る部位の膿瘍の處置に用ふ可き一方法であると信ずる。

## 6. 食道の癥痕性狭窄に對し「ラミナリヤ」を使用せし1經驗

井出守義君

演者は36歳の製煉所職工にして約1年前仕事  
中溶鑪爆發により、其の内容物を上半身に浴び  
たる際之を誤嚥し、其の1週間後より食道の通過  
障害を來し、之は漸次増強して現今流動物の少量  
を長時間を費して漸く攝取し得る以外何物も通過  
せざる患者に就てレントゲン寫眞により大體第2  
生理的狭窄部に當る部分に割合小範圍に限局せる  
も高度なる狭窄及び其の上部に於ける強度の代償  
性擴張を、亦食道直達鏡検査によりて上顎門齒よ  
り約23乃至27cmに亙り食道の擴張菲薄となり、  
28cmの部に於て癥痕性となり、其の部以下は高  
度に縮小し、ために左前方に偏し鉛筆芯木の非中  
心性狭窄を殘せるを認め、之に從來餘り其の應用  
を見ざりし「ラミナリヤ」を楔形に削りて、細きも  
のより順次太きものに代へつつ1乃至2週間の間  
隔を置いて挿入し、1回の挿入時間を24乃至40  
時間として13回挿入し、之によりて普通食を何等  
障碍なく通過し得る迄に回復せしめ得たる症例を  
擧げ、本法は操作簡單にして危険少なく、而も入  
手容易なる品によりて目的を達し得るが故に、狭  
窄の程度、時期等を考慮し適當なる症例を選びて  
使用する時は甚だ效果有る方法ならんと述べた  
り。

### 追加(1) 守屋 誠君

實は余も本症例に關し、最後に思ひきり太きも  
のを用ひたるに思ひ掛けなく抜去の際抵抗強く抜  
去出來ざるかと心配せし程なりき、演者の云はる  
る如く「ラミナリヤ」の挿入は適當なる症例を選び  
適當なる太き及び挿入時間を考慮す可きものなる  
事を大いに痛感せし所なり。次に本例以外に於て  
我教室に於て最近今1例硫酸自殺を企てたる22  
歳の女に於ける廣範圍に亙れる食道狭窄症に對し  
試みに「ラミナリヤ」2本縦列に挿入せし所、抜去

に際し附着せる絲の前後關係不明となり又同太な  
●るものを用ひたるためか抜去に際し甚だ困難を感  
じ結局少しく強行抜去せし1例あり。其の例は不  
幸抜去後2日にして死去(死因は強行抜去に起因  
せしや否や究明するを得ざりき)せしものなるが  
本例の如く廣範圍に亙れるものを選びかかる「ラ  
ミナリヤ」の用法を行ふ場合に於ては各絲に目印  
を附し、手前の方に少しく太きものを用ふるを適  
當とせん。「ラミナリヤ」はすべて使用前豫め其の  
時間的の膨大の程度を同種なる品質のものにつぎ  
て試験し置くを要す。

### 追加(2) 西村伊勢松君

余も約10年前、吳海軍共濟組合病院に於て松浦  
三郎君と共に同様な1例を経験した。24時間毎  
に抜き、1日置きにて又挿入し、約2週間にて軟  
食を充分攝取し得るに至つた。本例も井出君の例  
の如く狭窄範圍の短かかりし事が成功の一重要條  
件なりし事と思ふ。

### 追加(3) 森 秀 齋君

余は喉頭の狭窄に之を用ひたる經驗あり、之は  
18歳の若者の母が彼を殺すために喉頭を切傷し、  
後數年にして來たものなるが本例には不成功なり  
き。尚ほ婦人科の話に依れば太きものを挿入すれ  
ば抜去困難となるが故に必ず2本並列に挿入する  
をよしとすと。

## 7. 臨牀的には耳性化膿性腦膜炎と思惟 せられ、剖檢により鼻性腦膿瘍なる を知りし1症例

鈴木勇夫君

演者は演題の如き症例に遭遇し、頗る興味あり  
となし、其の臨牀的諸項に剖檢所見を併せ報告せ  
り。即ち患者は17歳男、約40日前頭部に激しき  
打撲を受け廻轉眩暈、頭痛、嘔吐を來し、内後2  
者は約3日にして消失せるも、眩暈去らず、之は

1 箇月後漸く消失し一時仕事をなし得る状態にありたるが、4日前より急に嘔吐、頭痛、眩暈、高熱を發來し、1日前より意識は濁濁し謔妄著明なりとて來院。鼻、耳出血等無く、一見重篤状態にして意識濁濁、謔妄等無く、頸部硬直、ケルニヒ氏現象著明にあり、加ふるに左側外旋神經麻痺ありて、同側耳に急性化膿性中耳炎の像顯著にあり腰椎穿刺を行ふに、強濁濁、壓350、細胞350、ノンネバンデイ強陽性なりき。

以上の所見より耳性化膿性腦膜炎として乳嘴蜂窠を開放せしに化膿性迷路炎の合併せるを發見す。之をも開放し引續き「リコール」の持續排出療法を施したるに、以後は臨牀經過竝に「リコール」所見比較的良好なりしも、術後10日目に到り、突如腦症狀増悪せしにより、腦膿瘍の疑ひの下に腦穿刺を行ひしも膿を證明し得ず。患者は翌日死亡せり。之を剖檢せしに、右腦半球(耳と反對側)の浮腫著明にありて、右側頭葉前端は楔狀骨大翼の後面の略ぼ中央に於て硬腦膜と癒着せるを發見、膿瘍は殆ど右側頭葉全般に及び、交叉槽、側大脳窩槽には膿汁の貯溜あり。而して左側頭骨の硬腦膜は正常にて竇も亦正常なりき。この頭蓋前額斷面に於ては左側上顎竇炎篩骨蜂窠炎の存在を認めたり。右の剖檢所見により演者は本患者につきては臨牀診斷と全く相違し、反對側而も鼻性腦膿瘍なりしを知り得たるものにして、之が感染に就ては演者は恐らくは其の根源は篩骨蜂窠にあり、之に偶々加はりたる打撲が關係せしものにあらざるやと思惟せり。

#### 追 加 小 田 大 吉 君

本例は鈴木君が精しく述べられた様な理由で最後に突然増悪して死亡するまで、てつきり耳性のものと考へて居たのですが、剖檢をして見ると、當外れにも鼻性腦膿瘍であつた例でありまして、我々は實際患者の死後剖檢をすることは少いのでありますが、もつと剖檢をしたら、耳性頭蓋内合

併症と臨牀上考へられるもので、この例の様に實は鼻性であるものが案外少くないのではないかと思ひます。私はハンブルグの「バルンベツク」病院に鼻咽喉領域に特別な興味と研究をもつて居られる病理學者グレフ教授を訪ねた時、鼻性腦内合併症は一般に考へられて居る程少いものでないことを種々な標本によつて其の傳染経路と共に示されましたが、臨牀上に於ても注意す可きであると考へます。尙ほこの例に於て腦膿瘍の診斷に關して注意す可きことは、鼻性のものを耳性と考へたのはあやまりでありましたが、腦膜炎の治療中、「リコール」の所見がよくなるのに突如再び腦症狀増悪して來ましたので腦膿瘍の存在に疑を置いたのでありますが、この關係は耳性腦膿瘍に關して前回の地方會でも申し述べました様に腦膜炎に腦膿瘍の合併し來る場合注意す可きであると思ひます。

#### 8. 聲門浮腫を伴ひ氣管切開を餘儀なくせられたる1「アグラヌロチトーゼ」症例に就て

小 坂 昭 男 君

演者は75歳の男子にて、其の血液に明かに高度の白血球減少、顆粒細胞の消失及び貧血等の「アグラヌロチトーゼ」〔血液所見 血色素含量50% (ザーリ)。血小板數18萬、赤血球數300萬、白血球數480。1枚の塗抹標本より淋巴球15箇「モノチーテン」2箇を數へ得たるのみ〕の所見を呈し、其の局所々見は壞疽性扁桃腺炎及び舌根部の壞疽性炎症に加ふるに聲門浮腫を合併し、爲に呼吸困難を招來し、餘儀なく救急的に氣管切開を行ひ、呼吸困難は消失せしめ得たるも其の後不幸死亡せる1例を報告せり。從來文獻上呼吸困難を來したる「アグラヌロチトーゼ」は之を見ず。本症に於て極めて稀なりとは云へ斯の如く氣管切開を要するが如き高度の呼吸困難を來すことある事實は注意す可きものなりと述べ、又本例に於て口蓋扁桃腺

壞疽部よりの塗抹標本に於て、通例「ムコーズ」中耳炎に見らると同様の粘液性連鎖球菌を證明せし事は、文獻上稀有にして尙ほ塗抹標本全般に亙つて膿球を殆ど全く認めず、總て細菌のみを純粹培養狀に證明せるは、本例の白血球減少が著しく高度なりし點と思ひ合せ、興味深き所見ならんと述べ、最後に演者は一般に本症の成因は骨髓中の顆粒細胞の成熟障礙と解釋す可きを最も妥當なりと附言せり。

### 9. 「ヒステリー」患者に起れる他覺的耳鳴

松原久之君

演者は34歳の女子に發來せし他覺的耳鳴を経験し、之が「ヒステリー」の一部症狀としての軟口蓋痙攣に隨伴せるを知れりとして此症例を紹介せり。即ち患者は幼時より屢々「ヒステリー」の發作を起し起居振舞常人の如くならず爲に未だ結婚せず。初診2日前より左耳に輕度の閉塞感あり、時々「ボコボコ」及び之に混りて「ブーブー」といふ耳鳴ありと訴ふ。右半身頸部以下に知覺鈍麻、右下腹部に壓痛(卵巢痛)あり、左耳鼓膜前下部に燐寸頭大の萎縮部あり、時々輕妙に陷凹す。左側口蓋弓竝に懸壺垂に1分間に5乃至10回の小橋痙攣に5秒—2、3分の間隔をおきて約1秒間持續する微細なる痙攣を認む。前者の小橋痙攣に相當して鼓膜の陷凹を見、自覺的には「ボコボコ」なる耳鳴りありと云ひ、試みに「オトスコープ」を連結して聴くに「ポツポツ」と微かなる音を聴取し得。後者の場合は患者が「ブーブー」なる耳鳴りを訴ふるも他覺的には聴取し得ず。經過、歐氏管通氣を行ふに翌日より耳鳴は多少輕快し睡眠良好となれり。「スバスマルギン」、「パピナールアトロピン」、濃厚硫酸「マグネシウム」等の注射を行ふに何れも右腕に行ひし時のみ翌日迄耳鳴消失し、左腕に行ひては效なしと云ふ。最近是他覺的耳鳴は消失し、患者の形容に従へば「自動車自分より高き所を通る音」が未だ時々聞ゆることありと。

### 10. 咽頭放線狀菌病

守屋 誠君

演者は26歳男子に20日來繼續せる左側咽後膿瘍の局所症狀あるにより之に切開を加へ排膿したるに、以來咽頭後壁左側に瘻孔を残し1箇月半に亙り閉塞せず、之よりの分泌物中に多數の線狀菌を發見し、剩へ周圍に浸潤の擴大せる傾向を有する患者に對し兩側扁桃摘出をなしたるに、左側扁桃腺後方より側索筋層下を経て瘻孔に通ずると思しき箇所を發見し、之が周圍を廣く搔爬したるに原病竈は全治し後之が扁桃腺を連續切片にて檢せしに右側には放線狀菌塊を有せざるに反し、左側には多數に之を發見し、之は腺窩内には勿論、實質内及び被膜以外周圍組織内にも侵入しあり。尙ほ被膜の一部病變のため缺損せる所見を認め、此事實よりして本症は扁桃腺内の病原より來り、直接被膜外にも侵入し人體を害し特有なる臨牀的所見を表はしたる咽頭放線狀菌病なりと斷じ、田中、小田、桑原の扁桃腺内放射線菌塊は人體に有害なる菌種即ち「アクチノミチエス・ホミニス」なりとの説に一臨牀的根據を與ふるものにして注意す可き所見なりと述べ寫眞を供覽し最後に近年に於ける放線狀菌病に對する療法傾向を文獻中より求め之が批判を行へり。

### 追加 高原滋夫君

余は曾て、反覆頸部に切開を加へるも更に治癒に向はざりし頸部放線狀菌病患者に對し、慢性炎症像を呈せし口蓋扁桃腺の摘出を試みしに、急に頸部疾患の治癒を來せし1例を経験し、尙ほ其の摘出扁桃腺を組織的に檢索せしに、誠に偶然なるか、患側の扁桃腺内に於てのみ放線狀菌菌塊を證明したることを併せ述べ、或は本例は口蓋扁桃腺内放線狀菌による二次的感染に因るものに非ざりと報じたり。而して之を口蓋扁桃腺よりの二次的感染とし、其の成立様式は如何にと考究せしに、第1に連續傳染は局所所見より考へられず、第2

に淋巴道感染は本菌の性質上否定され、第3に血行感染が問題となるも、本例に之を認めるには尙ほ多少の疑義の介在する所ありたり。茲に余が以上を再び追加報告せし所以は、教室に於て將來斯様な症例に遭遇せられたる場合、扁桃を試みられ、果して余の症例の如き結果の齎さるや如何、更に又口蓋扁桃腺と頸部放線状菌病（傳染経路の不明の）との間の關係に就ても教示さるる機會に恵まれん事を希望するが爲なり。

### 結 言 守 屋 誠 君

高原博士の御追加に感謝す。實は余も高原博士の御報告を拜聴致し之は本例に於て扁桃摘を行ふ決心をする事につき大いに力となつたと思ふ。余の例では病竈と扁桃腺との連續が明かに認められ浸潤に傳播された事が明かで、扁桃腺を病原感染門戸と明かに認められる例である。勿論扁桃腺には病側のみに菌塊が多量に認められましたのであつてこの扁桃腺を特に進入門戸と考へる根據の幾分かを負担して居るものなり。

### 11. 中咽頭腔に發生したるヴァンサン氏「アンギーナ」の1例

高 原 滋 夫 君

喉頭部の搔痒感、異物感、嚥下時食物の喉頭に引懸る感じ、倦怠感を主訴として來りたる70歳の婦人に於て、最初會厭喉頭面に發赤腫脹を認め、之は消炎療法で治癒したるも、1週間後には咽頭後壁、右側側索に薄き白色の義膜形成を來したり。其の塗抹標本竝に培養にて連鎖球菌竝に桿菌を認めたるにより、今回は根氣よく反覆義膜を除去し、局所に消炎劑の塗布を行ひたるも一向に治癒に赴かず、更に「デフテリー」血清の注射も行ひたりしも何等效果無く、遂には舌根部より會厭喉頭面にも義膜の侵入するに至りたり。此頃（發病後2箇月半の頃）に至り義膜の稍々點色調を帯び肥厚を呈するに至りたると共に、其の義膜中に連鎖球

菌の他紡錘狀桿菌、螺旋菌の多數存在するを認めるに至り、最後に「サルバルサン」(0.3g) II號を3回靜脈注射せしに、諸症狀急速に輕快し、發病以來3箇月半の長き経過の後に漸く之を全治せしめる事を得たり。而して演者は之等の症狀竝に経過より、本例は恐らくヴァンサン氏「アンギーナ」ならんとし、喉頭、舌根部等に現れたる本症の文獻を引用し、總括的に夫等に就て紹介する所ありたり。

### 追 加 田 中 政 次 君

最初側頭部に硬性瀰漫性腫脹を來し、種々の療法奏效せず、其の中嚥下痛と共に患側口蓋扁桃腺に潰瘍を生じ、後之に黃褐色の義膜形成を來せしものに對し、「サルバルサン」注射4回により急速に治癒せしめ得たる經驗を追加し、該例は恐らくヴァンサン氏「アンギーナ」なりしものと信ずとせり。

### 12. 左上顎竇網皮肉腫の1例

森 秀 齋 君(述)

長 尾 利 行 君

患者は36歳の男子、1箇月前左上第1臼齒部の齒齦を中心に腫脹し齒科醫により再三切開を受けたるも輕快せず、該切開創より左上顎竇と交通消息されたるにより演者等に紹介されたる者なるが顔面に於て左鼻翼外方より頬骨部にかけて腫脹を認むるも壓痛波動等無く、左側鼻腔は中鼻道より發生せる灰赤色の表面あまり平滑ならざる且觸るも著しき出血を來さざる腫瘍にて閉塞され、後鼻鏡にても中鼻道に腫瘍を認め、口腔に於ては左上顎に門齒及び犬齒の外悉く缺如し、齒齦より硬口蓋に互り圓球狀に拇指頭大、表面平滑滑々軟なる腫脹を認め、粘膜は稍々暗赤色を呈せり。切開創より消息するに左上顎竇と交通し多少出血す。鼻腔よりの左側上顎竇試驗的穿刺は殆ど抵抗なく行はれ且少量の血液を吸引するのみ、レントゲン寫

属にては左側上顎竇の外側及び顔面骨の大部分及び甲介骨影消失せり。ワツセルマン及び村田氏反應は共に陰性、又頸部には淋巴腺の腫脹なし、かかる者に對し鼻腔内腫瘍の一部の組織的検査により網皮肉腫なることを知り、直に左側總頸動脈結紮後、和辻、デンケル氏術式により廣く腫瘍を摘出せしに術後10日目突然苦悶、狂燥、嘔吐、意識濁濁、左側散瞳、右上肢麻痺、右側下肢錐體症狀充進等にて發作後19時間に死亡せり。本例に就て演者等は網皮肉腫症例は外國に於て2例、我國に於て1例の報告あるのみと述べ、患者の死因に関しては腫瘍の轉位の爲か、或は他の原因によるものか充分知り得るざも、恐らく腦脚にて四疊體附近に變化の起りしものならんとせり。

質問 田中文男君

死因の事で注意したいと思ふのだが、外頸動脈を結紮したのか。

答 森秀齋君

總頸動脈を結紮した。

追加 田中文男君

頸動脈を結紮するに當り注意すべき事がある。余は30年前、口蓋扁桃腺の悪性腫瘍の手術の時に外頸動脈を結紮した所、翌日反對側の四肢が麻痺した事があり、結紮した際に出來た血栓の遊離して腦に移動したと考へられたのであつた。之を防ぐ爲に外頸動脈の結紮は其の總頸動脈からの分岐點より出來るだけ上方で行ふ事を必ず心掛けねばならない。演者の場合は總頸動脈を結紮したのであるから或はこの注意が當らぬかも知れぬ、だが總頸動脈を一氣に結紮することは、夫れだけでも時に重大なる結果を招來した例がある。之等の事もこの際一應死因として考察上注意して置きたきことである。

13. 今秋神戸地方に於ける實扶的里流行に際し、最近3箇月間に於て予等が治療せし同疾患、患者に就ての經驗

細見英君(演)  
家永實君

演者等は神戸本院及び鷹屋分院に於て本年9月1日より11月30日までの新患者總數904名中、實扶的里患者60名(67%)に就て、年齢、性別を表示したる後、症例別としては鼻腔實扶的里20、咽頭實扶的里30、喉頭、氣管實扶的里10例なりしを述べ、療法として輕症なりし鼻腔實扶的里15例は血清を用ひず、「フォルモワクテン」のみを用ひ、他の5例は血清を用ひ、咽頭實扶的里は主として血清特に輕症なりし2例のみには「フォルモワクテン」を使用し、之等血清を應用せしもの内、血清の再注射をなせるもの7例、尙ほ1例に於ては血清に過敏なるため實扶的里恢復期血液並に血清(2週間目)を使用して效驗せし1例あるを述べ、次に咽喉頭氣管實扶的里は主として血清にて治療し、内、氣管切開を行ひたるは4例にて3名は治癒、1名は死亡したるを報告せり。次で演者等は之等全例中大量血清注射せしにも拘らず義膜消失困難又は遅延せしもの又は再出現せしもの6例あるに注意し、之等に對しては「フォルモワクテン」及び局所の硝酸銀塗布法を應用し、尙ほ扁桃腺摘出にて始めて治癒を見たる1例の存在せしをも述べたり。後麻痺に關しては2例を見たるが之等は當初に於て既に各7500 E. H. 15000 E. H. を注射せるを知り、注射血清量の少きより寧ろ體質及び毒力の如何に起因せるならんとなし療法としては、口蓋麻痺には食鹽水注射、其の他には「ビタミンB」の注射(皮下、腰椎腔内)を奨揚せり。

追加 登坂清喜君

余等が遭遇する「ヂフテリー」後麻痺は、大抵のものは扁側のものであるが、余は最近14歳の女兒

で厚い義膜があり血清 12000 単位を注射して治癒した後、2 週間を経て両側軟口蓋より頭部、上下肢にまで廣範圍に互る麻痺の來た食物も攝れない状態の患者を診た。其の豫後は患家の遠距離の爲聴くを得ず、目下問合はせ中なるも、こんな例は非常に稀で興味あるものと思ふので追加する。

### 結 言 細 見 英 君

療法のごとで、高度の「デフテリー」後麻痺には「ビタミンB」が有効の様である。之も皮下に用ふるよりも脊髄腔中に注入する方が良いらしい。

### 14. 「ムコーズ」中耳炎の「サルファピリジン」療法

西村伊勢松君

演者は耳漏中に「ムコーズ菌」を證明せる所謂「ムコーズ」中耳炎に對し、「サルファピリジン」「トリヤノン」及び「アゲプロン」療法を應用し、非觀血的に且、比較的短期間に治癒せしめ得たる 8 例(内、男 5、女 3、18 歳より 79 歳まで)に就ての經驗を述べ、用量としては總量 6.5 g. 18.5 g. 治療日数は最短 6 日より最長 29 日にして、経過は始め數日間本劑の 1—2 g. を使用し、後漸次減量したるが、數日乃至 1 週間にして發熱或は多量の排膿ありたる後、稍々急速に耳漏減少、諸症状の輕快を認め、且、膿汁中の「ムコーズ菌」も多くは其の頃より消失し、長きも 2 週間位にして認め難くなるとなし、演者は此成績より本治療法に依りて全「ムコーズ」中耳炎を非觀血的に速に治療し得るとは斷ぜざるも豫想外の治療好成绩なりしは注目に價すと結びたり。尙ほ本治療成績より推察し、此藥劑本來の作用よりして所謂「ムコーズ菌」と肺炎菌第 3 型とを別視し、所謂「ムコーズ」中耳炎の起炎菌より得らるる臨牀材料より採集し得るものの大多数は、純粹「ムコーズ菌」より寧ろ肺炎菌第 3 型の多數混在せるものと考へる

を妥當なりとの説に臨牀上藥物效果上より一根據を興ふるものに非ざるやと考察するに到りたるを附言せり。

### 追 加 小 坂 昭 男 君

余は或中耳化膿症に「基」「ズルフォンアミツド」劑を用ひてどうも治癒に向はざりしものに「トリヤノン」を用ひて眞に掌を返す如く頓挫的に治癒した 2 例を診た。之はやはり「トリヤノン」の、或種中耳化膿症に對し特に有效なるを示す事と考へるので追加する。

### 質 問 高 原 滋 夫 君

演者の治癒症例中には急性症状を呈して來りしもの多き様に聴取したが、鼓膜の蒼白浸潤、肥厚を有つて來り、潜行的経過を執る、所謂「ムコーズ」中耳炎なる型のもの、其のうち何例なりじや、又斯様なる症例に對して「ズルファピリジン」の効果は如何なりしや承りたし。

### 答 西 村 伊 勢 松 君

余の例で慢性に來たものは 1 例で、他は總て急性に來たものであるが、其の 1 例の慢性症は定型的な「ムコーズ」中耳炎の症状を呈し、而も極悪性のもので既に耳後部の腫脹して居た様なものであつた。経過は少し永くかかつたが之でも「サルファピリジン」劑で治癒した。

### 15. 初生兒急性上顎骨々髓炎の 1 例

宮 本 種 美 君

演者は生後 40 日の男兒の左上顎骨に定型的急性上顎骨々髓炎の症状を呈し、同時に右上膊骨及び左腓骨々髓炎を伴ひたる多發性骨髄炎の 1 例を報告せり。而して本例に於ては其の原因としては、特に認む可きものなく、或は乳兒期に於て骨髓を選擧的に侵す特殊の疾患が存在するものに非ざるかと推論せり。猶ほ患者には其の諸症状激烈を極

めたるが爲、積極的なる手術は之を施行し得ずして單に切開排膿を施すのみにて加療せし所、發病後16日目に敗血症々狀の下に斃れたり。

16. 出血性喉頭「ポリープ」に就て

田 中 政 次 君

演者は數年來漸次聲音嘶嘎の加はり、且近來相當量の血液咯出を反覆し肺結核惹いては喉頭結核の發來したりと悲歎に墜りしものに於て、聲音嘶嘎竝に咯血の原因が1側の聲唇下面より廣き莖を持つて出でたる暗褐色、小豆大の「ポリープ」によるものなるを確め、之を摘出し諸症狀を消失せしめたる經驗を述べ、摘出「ポリープ」は組織的に軟性纖維腫に屬し、内に多數の血管の増殖せるを認めたりと報じたり。

17. メニエル氏病に就て

小 田 大 吉 君

演者は過去2年間に觀察せしメニエル氏病5例、メニエル氏病と考へらるるもの5例、假性メニエル氏病と考へらるるもの1例に就き、メニエル氏病の概念を述べ、所謂メニエル氏症候群の内、反覆眩暈發作を來たし、耳鳴、進行性難聴を有する1

群を特別なる疾患と見做し、メニエル氏病と稱するライト、クローダンディー等の見解を承認す可きものとなし、ハリバイク、山川、ロリン等の剖檢的所見を紹介してメニエル氏病の病理竝に本態に論及せり。

追 加 田 中 政 次 君

余自身、時に突然方向不明なる眩暈發作來り、其の時に限り耳鳴著明に自覺する時あり、之等症狀發作的に來りては又止む、而も之は特に身體の疲勞著明なる時に自覺するものなり、何等かの御參考になればと追加に及ぶ次第なり。

18. 上顎竇レ寫眞撮影に就ての1考案

山 口 治 君

井 上 佑 太 郎 君

副鼻腔のX線寫眞撮影法中側面撮影法及びフアイエル氏の顛頂部より頤下部に向け放射する方法は其の像の稍々明瞭を缺く場合夥しとせず。演者等は上顎竇撮影の際、鼻腔内及び口腔内に小なる「フィルム」を挿入し種々なる方向より放射して部分的に明瞭なる竇内像を得たり。かくて演者等は其の標本寫眞を幻燈にて供覽し、本法が從來の方法に併用して役立つべきことあるを述べたり。

		當日出席者 (50音順)				
赤木(眼科)	井 出	井 口	井 上(佑)	小 田		
麻 植	小 野	田 岡	岡 田	奥 島		
笠 井	河 合	黒 川	熊 野	黒住(學生)		
久保(學生)	小 坂	菰 口	古 林	志 水		
鈴 木	田 中	田 中	高 原	田 村(勇)		
谷 原	寺 島	登 坂	土 居	長 尾		
原 見	廣 瀬	藤 山	福 武	星 島		
細 見	松 原	松 村	松 浦	宮本(種美)		
宮本(正明)	三 木	守 屋	森	山 口		
龍 治	渡 邊					